

【対象】1994年1月から2004年12月まで、当院で手術を施行した大腸穿孔症例28例について検討した。

【結果】平均年齢は64.8歳で、穿孔部位はS状結腸が最も多く、術前のX線では48%，CT検査では83%に腹腔内遊離ガス像を認めた。穿孔原因は医原性が最も多く、他には悪性腫瘍、虚血性、特発性、憩室炎、炎症性腸疾患、結腸軸捻転、宿便性、潰瘍だった。病変部切除及び人工肛門造設が最も多く施行されていた。術死症例は5例認め、術死症例は、術前白血球数が $3500/\mu\text{l}$ 以下、発症より手術まで12時間以上要した症例が有意に多かった。

【結論】大腸穿孔症例は、早期診断及び早期治療が重要と思われた。重症化が予想される症例では、より積極的な集学的治療が必要と思われた。

7 大腸内視鏡検査に関連した偶発症に関するアンケート調査 — 新潟大腸肛門病研究会の幹事施設を中心に —

須田 武保・幹事一同*

日本歯科大学新潟歯学部外科

新潟大腸肛門病研究会幹事施設*

今回、新潟大腸肛門病研究会の幹事施設での大腸内視鏡検査に関連した偶発症についてアンケート調査を用いて検討したので報告する。

【対象と方法】2000年1月～2004年12月までに新潟大腸肛門病研究会の幹事施設で行われた大腸内視鏡検査を対象に偶発症の発生頻度、内容および個々の症例の臨床的特徴、経過について検討した。

【結果】大腸内視鏡検査に関連して発生し、新たな内視鏡検査および加療（入院、止血剤の投与、内視鏡的な処置など）を要した偶発症は、87,611例中235例（0.26%）に認められた。偶発症の内訳でみると出血196例（83.4%）、穿孔27例（11.5%）、腹痛4例、腸閉塞2例などであった。発生頻度は出血0.22%，穿孔0.03%であった。偶発症例での死亡例は2例（0.002%）であり、いずれも穿孔例であった。穿孔部位は96.3%が左側

結腸であり、穿孔の原因になった内視鏡手技は59.3%が観察行為のみで起きていた。穿孔に対する処置として85.2%で緊急手術が施行されていた。

【結論】偶発症の発生頻度は0.26%であり、全国集計の約4倍であったが、対象例の検査内容に治療例が多く含まれている可能性があり、さらなる検討が必要と考えられた。